

相談援助実習後におけるパフォーマンス評価実践の試み

—客観的臨床能力試験（OSCE）を通じて—

○ 徳山大学 氏名 井上 浩（会員番号 2450）

キーワード：実習事後指導、パフォーマンス評価、客観的臨床能力試験

1. 研究目的

社会福祉士の相談援助の実践は、日常生活を営む上で支障をきたしている利用者に対して相談援助を行うことで、利用者に「最善の利益をもたらす」ことにある。利用者に対して「最善の利益」をもたらすためには、社会福祉士が一定水準の力量（コンピテンス）を持つ必要が出てくる。一方、社会福祉士の養成教育においては、相談援助実習（以下、相談援助実習を「実習」と表記する）が一定水準の力量を担保しているかどうかを把握する科目である。社会福祉士の実践力を担保しなければならないという点から見た実習評価をめぐる課題としては、①実習前の評価に関わる課題と、②実習終了後の評価に関わる課題の二つがあることが分かる。①については、学生を実習に出せるのか、出したとしても養成校が求める水準まで到達する見込があるのかを評価するという課題であり、②については、実習を終えた学生が、本当に養成校が求めた水準まで到達しているのかを評価するという課題である。本報告では、以下特に②について議論の対象としていくこととする。実習を通じて、実習生である学生はどのような学びを体験してきたのか、その学びは社会福祉士養成校として期待できる内容なのか。実習後の学びを評価表というツールではなく、学生自らのパフォーマンスを通じて評価していくことは、「なぜそのような行動を取ったのか」という、実習後のスーパービジョンの観点からも重要なことだと考えた。そこで、実習後のパフォーマンス評価について、その重要性と概要について報告することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

パフォーマンス評価を行う方法にはいくつかある。例えば、実習後の実習指導では実習報告書の作成は必須事項であるが、この実習報告書を通して、実習生がどのようなパフォーマンスを行ってきたのかを確認することができる。しかし、この方法では実習生のパフォーマンスを「直接的に」観察することは難しい。パフォーマンスを「直接的に」評価する方法の一つとして、社会福祉領域以外の分野、特に医学教育や看護教育の分野、理学療法分野では、早くから客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：以下、「OSCE」と表記）が取り入れられてきた。社会福祉領域でも、北海道ブロック社会福祉実習研究協議会におけるOSCEの活動が盛んである。本学では、実習後OSCEを実習終了後の学生に実施し、パフォーマンス評価の効果について検証を試みた。対象は、実習終了後の学生11名であり、相談援助実習指導の時間内に模擬クライアント3名に対して、構造化されている面接を行うことを求めた。課題は、利用者の困難把握とアセスメントである。評価はルーブリック評価を用い、面接時間は一人12分、面接直後に実

習担当教員と外部評価者から3分間でフィードバックを行った。OSCE終了後は、学生が振り返りを持てる時間を設けた。

3. 倫理的配慮

実習終了後の、相談援助実習指導の初回にOSCEを行うことを学生には伝達し、OSCEの結果を研究資料として用いることについて文書を配布し、承諾を得ている。このことは、特に社会福祉学会研究倫理指針第2指針 B 事例研究の要件を遵守している。

4. 研究結果

実習後OSCE終了直後の振り返りでは、学生から「難しかった」「緊張して言葉が出てこなかった」「言葉が詰まってしまって、頭の中が真っ白になってしまった」などの反省点が出てきた。しかし一方で、「実習後OSCEを行うことで、自分に何が足りないのかがよく分かった」「実習中に、実習指導者から言われた『利用者の気持ちに寄り添う支援を行わなければならない』という意味がようやく理解できたような気がする」という肯定的な意見も出てきた。

実習後OSCE終了後翌週に実施した実習の振り返り授業では、学生に実習後OSCEと実習場面を比較して、なぜ実習後OSCEで上手くパフォーマンスができなかったのかを学生に話し合ってもらっている。そこからは、例えば「実習中ならば一ヶ月あるので利用者との関係が築けるように感じるが、実習後OSCEでは12分という時間内で関係を作り上げていかねばならないという焦りを感じる」や、「実習ではこちらから働きかけなくても話をしてくれたが、実習後OSCEでは自分で話を広げていかねばならないので緊張してしまっただ」などが学生から出されている。これらを整理してみると、①限られた時間から生まれる利用者との関係性確立の問題、②利用者との生活課題認識のずれから生じる問題、とに分けていくことができた。

5. 考察

本報告では、実習後評価におけるパフォーマンス評価の試みを、実習後OSCEを通じて明らかにすることで、パフォーマンス評価の重要性を指摘した。パフォーマンス評価を通じて学生は自己評価を行い、そのことによって、学生は実習が終わった後に自らの学びで不足していた部分を認識し、「学びの改善」に結びつけていくことができる。

今後の課題点としては、一つは、実習後OSCEの内容を精査していく一方で、養成校として期待できるパフォーマンスまでいかに引き上げていくかであり、もう一つは、そもそも実習後の評価において、実習先の指導の影響をどれだけ反映させていくことができるのか、ということである。本研究では、実習先の指導の影響を排除しているが、今後はパフォーマンス評価の結果を、実習先の指導者にフィードバックしていく必要がある。